

家庭教育支援を あらためて考える

「私たちは何のために家庭教育支援を行うのか」

具体的な施策の前に、その「目的」から議論したい

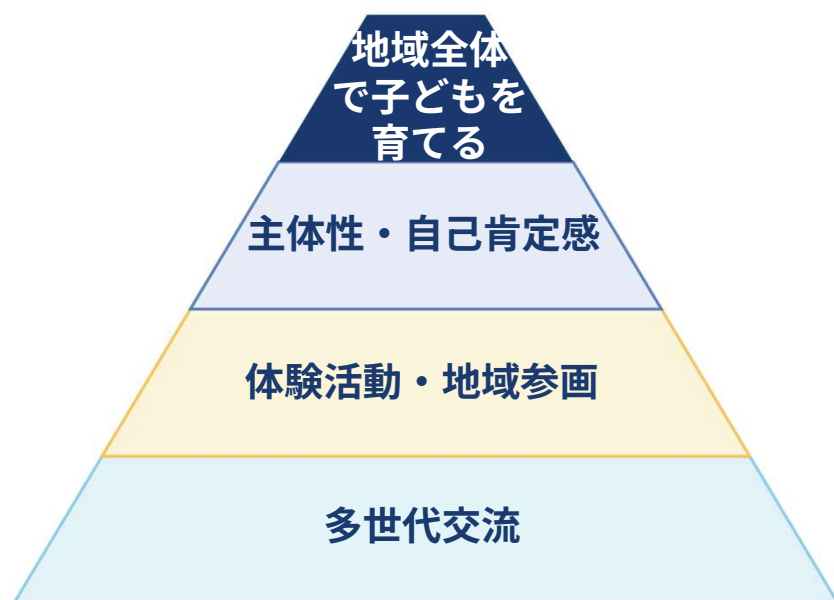
本日のいちばんの問い

子どもは、見たことのない未来を選ぶのだろうか



昨年度の提言書を読み返すと、底流に「**地域全体で子どもを育てる**」という考え方が見えてくる

提言書のキーワード・ピラミッド



三者が連携してつくる循環



学校

学びと日常を支える場



家庭

日々の生活と価値観を育む場



地域

多様な人と機会に出会う場

私の立場 この方向性に共感している。— しかし、ぬぐえない違和感もある。

国の位置づけ

国は家庭教育を「すべての教育の出発点」と位置付け、生活習慣・規範意識・倫理観・自立心などを育む取り組みが進められている

議論の前提と、現実とのズレ

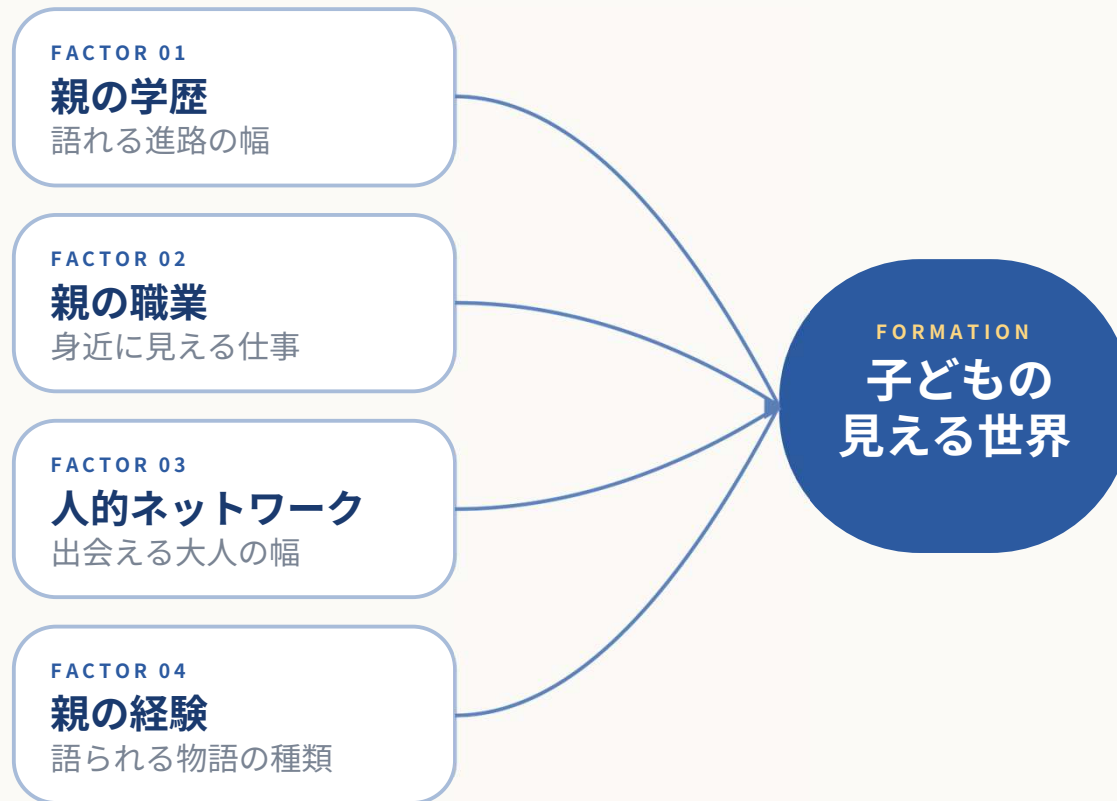
観 点	議論の前提（標準的な家庭）	現実には
教育機会	親が学校教育を十分に受けている	親自身が十分な教育機会に恵まれなかった場合もある
進学経験	進学経験があり進路を語れる	進学経験がない場合もある
社会との接点	社会と接点があり相談できる相手がいる	人的ネットワークが限られていることもある
子どもへの関わり	勉強を見られる／将来を相談できる	日々の余裕や情報そのものが届きにくいこともある

これは親の責任ではない。親もまた、自分が見てきた世界の中で生きている。

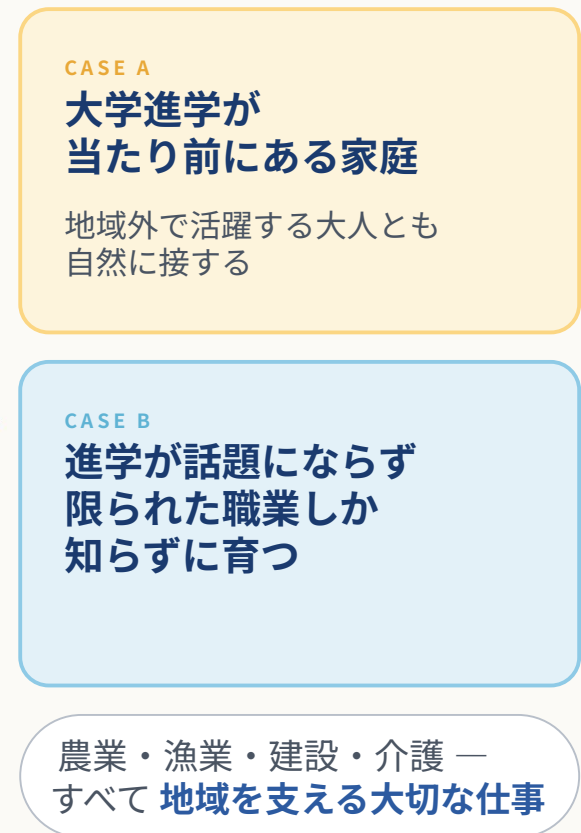
だから、見たことのない未来を子に示すのは簡単ではない。

人は、知らないものを目指せない。問題は **職業の優劣** ではなく、**「選択肢を知る機会」** の差。

INPUT / 親の世界



OUTCOME / 子どもに見える選択肢



問題は職業の優劣ではない。**「選択肢を知る機会」** の差である。

家庭の責任ではない。—ただ、**家庭だけでは届きにくいもの**が確かに3つある。
この3領域を、社会としてどう支えるか。

①



基礎学力

- 読む力
- 書く力
- 考える力
- 表現する力

文章が読めなければ、
どんな機会も生きてこない。

②



多様な世界との出会い

- さまざまな職業
- さまざまな生き方
- さまざまな価値観

人は、知らないものを
目指すことはできない。

③



信頼できる 大人とのつながり

- 相談できる人
- 認めてくれる人
- 親以外の安全基地

家庭の中だけでは、
出会いきれないこともある。

1 問題提起

現在の施策は、子どもの
「選択肢を知る機会」として十分か。

既存の主な施策

図書館

地域学校
協働活動

放課後の
居場所

体験活動

多世代交流

施策は「ある」

しかし、子どもの可能性が広がる ところまで届いているか

2 原因

地域は、家庭の価値観・経験・人的構成の延長
になりやすい

- ◆地域内の大人は、親世代と似た経験・価値観の中で暮らしている
- ◆外側の世界に出会いにくく、出会えても単発で終わる
- ◆体験が、子どもの将来の選択肢につながりにくい

3 欠けているもの

5つの設計要素 — 上にいくほど高度

- | | | |
|---|--------------|-----------------|
| 5 | 届きにくい子どもへの設計 | 参加を待たず、出向く仕組み |
| 4 | 伴走 | 信頼できる大人の継続的関わり |
| 3 | 意味づけ | 出会いを「自分ごと」に翻訳する |
| 2 | 橋渡し | 地域内外をつなぐコーディネート |
| 1 | 継続性／土台 | 単発でなく、積み重なる関わり |



4 改善の方向性

「誰を呼ぶか」より
「どう つなぐ・続ける・次へ 渡すか」

- ◆ 設計の問題として捉える
- ◆ 地域内資源と外部資源を組み合わせる
- ◆ 「ある」を 届く・つながる・続くへ

5 具体策

委員会で検討したい4つの打ち手

A. 継続型プログラム

地域内外の大人を組み合わせ、
複数回継続

C. 接続役の明確化

学校・地域・社会教育をつなぐコ
ディネーター

B. 出会いを学びにする流れ

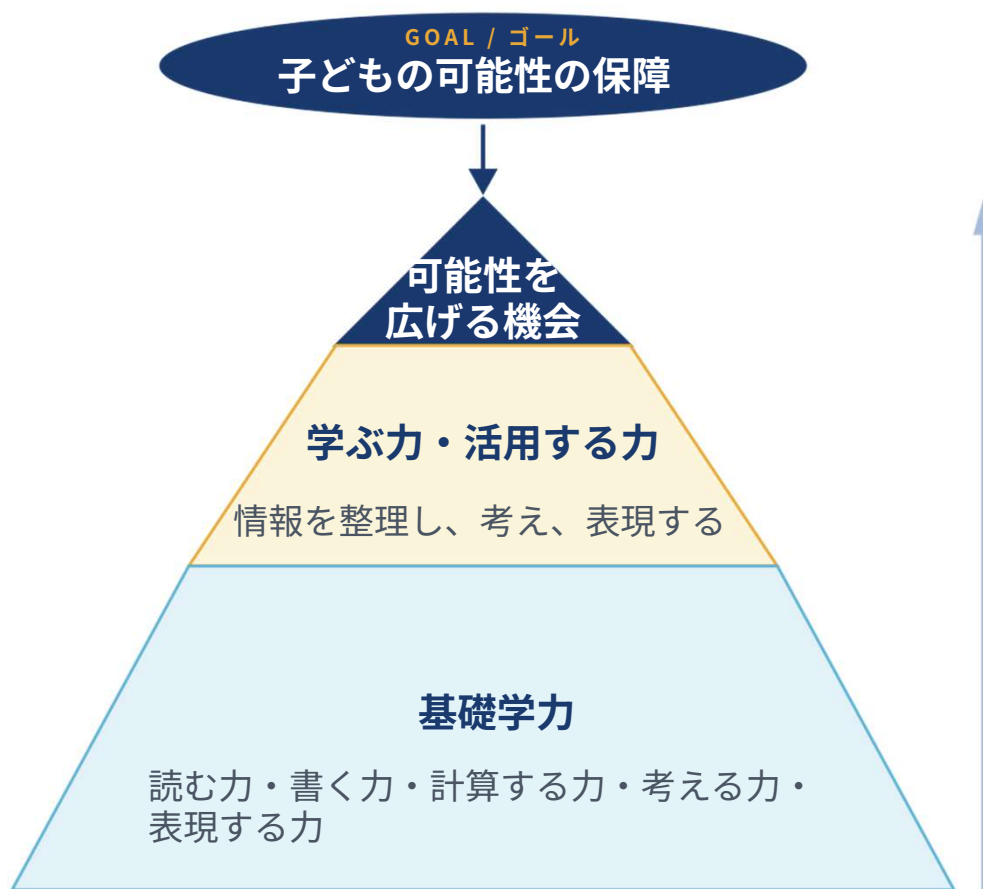
出会い → 対話 → 振り返り → 再挑戦
を設計

D. 届いていない子へ届ける

参加を待つだけでなくアウトリーチ
設計

外部に頼るのではなく、地域の中と外をどうつなぎ、どう続けるか
鍵は施策の中身ではなく「設計」にある。

土台の **基礎学力** があって、はじめて**活用する力**が育ち、その上で **機会** が生きる。
そして頂点に 子どもの可能性の保障 がある。

**上層****可能性を広げる機会**

体験活動・探求学習・多様な大人との出会い・地域参画
下層が育ってこそ、機会が「生きた経験」になる。

中層**学ぶ力・活用する力**

文章を読み解く・情報を整理する・自分の考えを表現する。
基礎学力を「**使える力**」に変える。

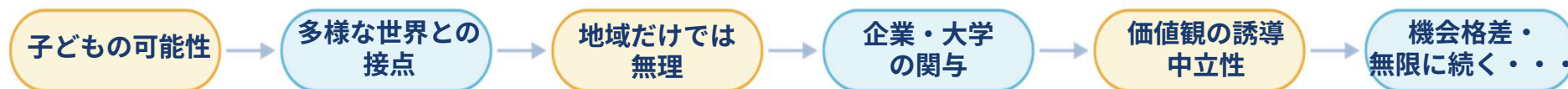
土台**基礎学力**

読む・書く・計算する・考える・表現する。
どれだけ素晴らしい体験があっても、文章が読めなければ理解できない。

基礎学力と機会は **二者択一ではない**。
下から積み上がってこそ、可能性は保障される。

「何が正しいか」ではなく、「**どこに力を注ぐべきか**」を考えたい。
苦しくなるのは — **階層の違う問題を、同じテーブルで解こうとする**とき。

複雑化していく連鎖



解決すべき課題と、向かうべき方向を分ける

A. 解決すべき課題

完全な解決策は、分からなくてもいい

地方の人的資源不足／人口減少／教育格差／家庭格差／
地域格差／価値観の多様性／企業の影響／行政の限界...

≠

B. 向かうべき方向

何を保障したいか、は決められる

「自分が担える範囲」も決められる。
— だから、まず **方向** を共有することから始めたい。

同じテーブルで考えると動けなくなる



自分の半径5メートル

やることが、見える

目の前の子ども・家庭・地域に対して、
自分が担えることは何か — 言葉にできる。



社会全体の構造問題

同時に解こうとすると、動けなくなる

自分が変えられる範囲と一緒にテーブルに乗せた瞬間、苦しくなる — 全部を同時には抱えきれない。

まず **「何を保障したいか」** を共有するところから始めたい。
こだわりの中心は、**子どもが自分の人生を自分で選べる状態**。

今後の議論の論点整理

委員会で議論を進めていくにあたり、本日の話から導かれる **6つの論点** を整理しました。
ひとつずつ、共に向き合っていきたい問いです。

01 目的と手段の整理

子どもの可能性をゴールに置けるか

- ◆ **子どもの可能性** が目的、**親への支援** はその手段の一つ。
- ◆ 目的と手段の順序を、まず共有したい。

02 家庭と社会の役割分担

家庭に求めること、社会が担うこと

- ◆ どこまでが家庭の領分で、どこからが社会の責任か
- ◆ 「親を変える」前提を、いったん横に置いて考える

03 機能しているかの見方

何を見れば、施策が機能していると言えるか

- ◆ 参加者数・開催回数 だけでは **届いた** とは言えない
- ◆ **継続・橋渡し・伴走** が回っているかを、まず見たい

04 家庭の延長で閉じない設計

地域の外の世界と、どうつながるか

- ◆ 「誰を呼ぶか」より **「どうつながり、どう続けるか」**
- ◆ **橋渡し・意味づけ・継続・伴走** をどう仕組むか

05 地域の役割

地域を「補完」ではなく、どう捉え直すか

- ◆ 地域もまた、その地域の経験の中にある
- ◆ 「家庭格差を補完する」以外の役割の言葉が要る

06 最後の問い / 中核

社会教育委員会は、まずどこから始めるか

- ◆ 「子どもの可能性を保障する」という大きな目的のうち、私たちが **その領分として担えること** を、どう言葉にするか。
- ◆ 全てを一度に引き受けず、まず **「次の一歩」** として何を議論するか。

家庭教育支援を考えることは —
親支援の方法を考えることではなく、

“

私たちは、子どもが自分の人生を
主体的に選択できる状態を、
どこまで保障する責任があるのだろうか。

”

